

< 2017年 6月 >

古賀 順子

「印象派の父『ピサロ展』」

夏のバカンスが近くなってきた6月、カミーユ・ピサロ(1830-1903)が描く田園風景、畑で農作物を収穫する人々、羊飼いの娘、洗濯をする女性に魅了され、自然が美しい田舎へ行きたい気持ちになります。

パリでは、6区のリュクサンブール美術館(3月16日~7月9日)と16区のマルモッタヌ美術館(2月23日~7月2日)の2ヶ所で、「ピサロ展」が開催中です。マルモッタヌ美術館には、ピサロの生涯を通じた約60点の作品が展示され、リュクサンブール美術館では、パリ郊外のポントワーズに近い、エラニーの村を描いた作品がテーマになっています。

カミーユ・ピサロは、アンティル諸島のデンマーク領セント・トーマス島で、フランス国籍でユダヤ人実業家の両親に生まれます。現在はアメリカ領ヴァージン諸島ですが、1666年から1917年までデンマーク領だったため、ピサロは、生涯、フランスとデンマークの国籍を持ち続けます。

父親の事業を継ぐことを拒み、画家を志し、1855年セント・トーマス島を離れ、パリに移り住みます。折しもパリでは、ナポレオン3世が国威を賭けて、「芸術と工業に貢献するフランス」を讃えるべく、「第1回パリ万国博覧会」を開催していました。期間は1855年5月15日から11月24日まで、9月にパリに到着したピサロは、驚嘆の思いでパリ万博を訪れます。鉄道が開通し、アメリカのアイザック・シンガーが発明した「シンガー・ミシン」が万博金メダルを受賞し、工業が謳歌される時代を告げます。現在のシャンゼリゼ劇場の敷地に、「芸術(ボザール)パビリオン」が建設され、ドラクロワとアングルは、万博実行委員でもあり、特別室で万博出展をします。『オルナンの埋葬』と『アトリエ』の出展を拒否されたクールベは、自己出展で対抗するという事態が起きます。ピサロは、ドラクロワやアングルよりも、クールベを支持し、新しい

時代の絵画への移行を暗示しています。

ピサロは、パリの美術学校に席を置きますが、ほぼ独学で絵を学びます。1860年、ピサロ家の家事手伝いとして雇われたジュリー・ヴェレ(1838-1926)との間に8人の子供ができ、常に経済的に苦しい生涯を送ります。ユダヤ人の両親は、カトリックで身分も低いジュリーとの結婚に反対し、1865年父親が亡くなり、1871年、ようやく籍を入れます。貧しい生活は続きますが、アナキストの立場を貫き、セザンヌ、モネ、ルノワール、シスレー、カイユボットと言った印象派の画家たちから師と仰がれます。

1874年4月「第1回印象派展」が開かれ、1886年までに計8回(74, 76, 77, 79, 80, 81, 82, 86年)が行われ、毎回10名から30名が参加し、ピサロだけが、8回全ての「印象派展」に出展しています。季節や時刻により、様々に変化する光の効果を追求するという共通の絵画理念を持って、野に出て、地に働く人々を描いた印象派グループも、1886年を最後に、それぞれの道を進んでいきます。絵画の上では、セザンヌやモネとは求めるものが異なるピサロは、「新印象派」を提唱する新しい世代のスーラに共感します。

生活費に困り、転々としてきたピサロですが、1884年から、エラニーの一軒家に落ち着きます。ピサロにとって、モネのジヴェルニーに匹敵する、制作の地になります。エラニーの家と風景、リンゴや野菜を収穫する農民、羊飼いや、点描画の影響を受けた、光に溢れる多くの作品が誕生します。また、エラニーに住むようになってからは、時間がかかる点描画だけでなく、生計を支えるために、速く仕上げるのできる水彩画、エッチングなどの新たな制作も意欲的に進め、下層社会を擁護する雑誌に挿し絵も出版しています。ギュスターブ・エッフェル(1832-1923)が、エッフェル塔を建て、工業を進歩させたように、大地に生きる人々と田舎の風景を描くことで、絵画の進歩を目指したピサロの人生は、19世紀後半のフランス社会の縮図を見るような気がします。